

熊山征伐で全滅か？

塩売り勘兵衛の話を聞いた殿様は、すぐ熊山を征伐することに決めました。数日経って、殿様から熊山征伐の命令を受けた大将の菊池二郎武光は大軍を引き連れて板本地区に到着しました。ついに熊山の征伐です。塩売り勘兵衛は、その大軍の数の多さに腰を抜かすほどびっくりしました。大将の菊池二郎武光は、馬の背に乗って勘兵衛を指さしたかと思うと、大きな声で「そこの勘兵衛とやら、平家落人が住んでいる熊山に案内せえ！」

と命令をしました。

「へ！、へい。」

と勘兵衛が頭を下げると、右手を高く上げ

「熊山征伐じゃ、いざ出陣！」

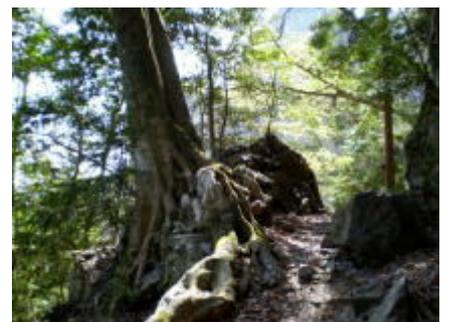
という掛け声に合わせるように全軍が氣勢を上げ、前に進み始めました。

（大変なことになってしまった、一体この後どうなってしまうのだろうか。）

と不安を覚えながら塩売り勘兵衛が道案内し始めると、道はすぐに人一人がやっと通れるほどの細い山道となりました。ついには道も無くなり、前方には背の高い草木がはびこってジャングルのように生い茂った木々が人の進入を拒むかのように上から覆い被さっています。

あたりは一瞬にして夕方のように暗くなり、肌を刺すように急に寒くなりました。その上、川の水が地響きのような音をたてて、すごい勢いで流れ落ちています。馬に乗っていた菊池二郎武光もとうとう馬を下りて歩き出しました。勘兵衛が案内する道は、一歩でも足を踏み外すと谷底に落ちてしまうほどの急な斜面で、

這うようにして登らなければならないくらいの断崖絶壁がずっと続きます。今まで体験したこともないほどの険しさのため、たびたび休憩をし



ながら進んだものの、全員が疲れと心の不安でヘトヘトになってしまいました。出発して1時間ほど経ったころ、

「おい！勘兵衛！、熊山は未だか？」

と菊池二郎武光が聞くと、

「菊池さま、ここはまだ熊山に入ったばかりの所です。今までの道は楽な方で、これから先はもっと大変な道になります。みんなで熊山の山頂まで進むとなると、あと7時間はかかるでしょう。」

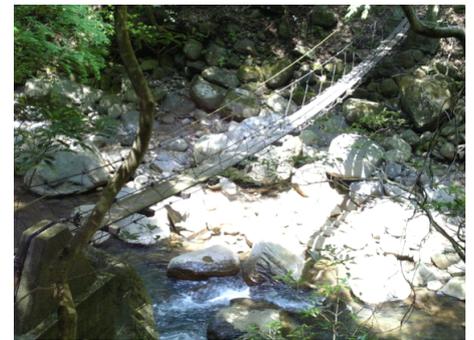
という勘兵衛の声を聞いた者たち全員が呆然としてしまいました。しかし、前に進むしかありません。途中休憩が終わると、弱々しい出発の掛け声に誰一人反応することもなく、無言のまま、ゆっくりと動き出しました。

出発から4時間ほどが経ち、もうすぐで熊山まで半分という目印の吊り橋が見えてきました。全員がへろへろの状態だったため、しばらく休憩をすることにしました。すると、下の方から

「菊池さま、菊池さま」

という声が聞こえます。菊池二郎武光は(何事か?)と、思っていると、熊山征伐の出発から遅れて後を追ってきた若者が、息も絶え絶え菊池二郎武光の前に片膝をたてて、殿様から預かった手紙を手渡したのです。すると、その手紙を読み始めた菊池二郎武光の顔から一瞬にして血の気が引いていくのを誰もが感じたのです。殿様からの手紙には

菊池二郎武光、緊急事態である。都で足利尊氏と新田義貞・楠木正成連合軍が戦いをして、足利尊氏が攻め落とされ敗れた。そのたくさんの家来たちが筑前つまり今の福岡県に逃げてくる情報が入った。大変な事態だ、一刻を争う。すぐに筑前に向いて迎え撃たなければ、わが菊池が危ない。熊山征伐を即刻中止して大至急、城に戻れ！



と書いてありました。手紙を読み終えた菊池二郎武光は、すぐに立ち上がり、
「熊山の征伐は中止する！すぐに引き返して城に戻る
こととする！」

と突然命令をしたのです。塩売り勘兵衛は勿論のこと、周りにいた誰もが、何が何やら訳も分からず突然引き返すことになったので大変驚きました。引き返す途中で、その訳を知ったのでした。

五家荘は、今回そして木のお椀発見で殿様が病気になってしまうなど、五家荘攻撃の直前になって中止となる神がかり的な出来事が発生したのは偶然とは思えないくらい不思議なことが起きています。

その後あと何年たっても不思議と五家荘征伐は行われることもなく、いつの間にか元の静けさに戻っていきました。

